

## 講演会の今昔

村上武次郎

この度本協会創立 50 周年に際し、協会に関する回顧または思い出を書くようにとのご委嘱があつた。筆者は大正 5 年以來仙台に居住し、協会の仕事には何等お手伝いもできなかつたが、その事業の一である講演会にはよく出席し、また演壇にも立つたので、古い記憶と会誌「鉄と鋼」の協会記事により大正時代から講演会の推移を考えて見た。

筆者が始めて講演会に出席したのは大正 7 年秋であつた。本多光太郎先生が東北大学臨時理化学研究所(金属材料研究所の前身、大正 5 年開設)で、金属の物理的方面の研究を始められ、その結果を東京において、毎日夕刻より 3 日にわたつて講演された時で、筆者も実験した一部を話したのであつた。当時学会の講演会は時々開かれたようであるが、大抵夕刻 6 時頃から始められ、演題は海外視察談とか、鉄鋼業の趨勢とか、または製鉄製鋼に関する啓蒙的な講演が多かつたようである。かような時代に本邦においてなされた金属の新しい方面の研究結果を始めて発表されたので、聴講者も多く、青年学徒の研究意欲を高めたことも大きかつたようで、その後の講演会には特定の題目についての研究発表が次第に多くなつて来たようである。また大正年代の講演会は大抵夕刻より開催せられたので、講演者は 1 名か 2 名のことが多かつた。

講演大会として多数の講演者が午前より午後にわたり、研究結果を発表するようになったのは、大正 14 年本協会創立 10 周年記念講演大会からで、その時の講演件数は 13 件であつた。それより後講演大会は昭和 5 年までは年 1 回、その後は年 2 回となり、春は東京秋は地方で行なわれた。地方は八幡、大阪、室蘭、名古屋または満州など鉄鋼業の盛んな処で開催せられ、工場見学や付近の観光などができたので、楽しんで出席したのであつた。しかし大正の終りから昭和の初め頃の講演大会には、まだ講演件数も少なく、第 2 回(大正 15 年、八幡)には 19 件、第 3 回(昭和 2 年、東京)には 26 件に過ぎず、講演者には協会から旅費が支給されたのであつた。今日の盛大なる講演大会と比較すると、実に隔世の感がある。

昭和に入り各大学、軍工廠、諸会社等における研究が漸次盛んとなるにつれ、学会講演会は次第に盛大となり、昭和 4 年には日本鑄物協会、同 12 年には日本金属学会

が設立せられ、鉄鋼関係の若干の論文はその方に移つたであろうが、昭和 13 年(第 20 回、大阪)には 36 件、翌 14 年(第 21 回、東京)には 33 件の講演があつた。

日華事変より大太平洋戦争に進むに従い、重大国策として高度国防国家の建設、生産の増強が強調せられ、兵器工業を始め、鉄鋼業は軍部の奨励によりますます隆盛となり、自給自足、生産増強の必要から、技術上の研究が一層促進せられた。したがつて講演大会における講演件数も次第に多くなり、昭和 17 年(第 27 回大会、東京)には 70 件、翌 18 年(第 30 回、大阪)には 68 件の多きに達し、何れも 2 日間 2 会場に分れて講演が進められた。また会誌による研究発表も多くなつてきた。

しかるに戦争が熾烈となるに従い、物資窮迫し、昭和 19 年以後は会誌用紙の配給激減し、毎月の会誌発行も困難となり、一方国有鉄道は軍需品輸送の必要より一般旅客の乗車制限となり、全国より会員の集合を要する講演大会の開催不可能となつた。そこで札幌、仙台、九州の各地に支部が設けられ(関西支部は既に設置)、地方講演会が度々行われることとなつた。しかし昭和 20 年 4 月には鉄鋼協会創立 30 周年記念式典と講演大会が東京で行われたが、その際集會中に空襲警報が発令せられ、一時不安を感じたことは忘れがたい印象である。

昭和 20 年 8 月終戦後一時虚脱状態となり、翌 21 年には講演大会も開かれなかつたが、22 年秋には東京において第 34 回講演大会が開催せられた。その時には講演件数 108 件の多きに上り、3 会場に分れて講演が進められた。その後講演大会は戦前と同様年 2 回東京と地方において開催せられ、講演件数はますます増加し、年により多少の増減はあつたが、昭和 26 年 4 月(東京)には 129 件、31 年 10 月(広島)には 141 件、35 年 10 月(札幌)には 174 件、38 年 4 月(東京)には 190 件、38 年 10 月(名古屋)には 200 件を突破して 201 件に達し、39 年 10 月(富山)には 216 件となり、会場も 8 会場を要するの盛況に達した。

以上は本協会講演大会における講演件数であるが、さらに金属学会、鑄物協会等において発表された鉄鋼関係の講演件数を合算すれば、一層多くなる筈である。

かくのごとく講演大会における講演件数の増加は、本邦における鉄鋼に関する研究開発の向上進歩を示すもの

というてよからう。これによつて見ると本邦における鉄鋼に関する研究開発は、大正時代に芽を発し、昭和に入り次第に成長し、終戦当時一時衰退したが、戦後急速に発展し、今日の盛況に達したことが知られる。今や科

学技術水準においても、また鉄鋼生産額においても、英独等の先進国を凌駕するに至ったことは、まことにご同慶の至りであつて、その推進機関として日本鉄鋼協会の功績偉大なるを痛感する次第である。

(名誉会員・元東北支部長)

## 日本鉄鋼協会 50 年の思い出

児 玉 晋 匡

近頃医学の進歩発達によつて、人生僅か 50 年が 15 年近くも延びたと言われるが、50 年と言えば誠に長い歲月である。私が高等学校時代、担任教師から今後発達する学問は冶金学であると聞かされ、何のこともなく冶金学科に入ろうと決めたのである。大学一学年の時足尾銅山に実習にやられ、次の年は釜石製鉄所に行つた。当時釜石には鉄道もなく遠野という町から峠を越して行つたものである。足尾銅山の硫黄臭さに驚かされ、今度は釜石の交通不便の山奥に失望させられたものである。当時の釜石製鉄所は、15 t の満庵鉄炉と 20 t 許りの溶鉄炉、それに 15 t の平炉とであつた。溶鉄炉から真赤に熔けた銑鉄が噴出し、平炉からは水の如くに火花を散らして取鍋に流れ込む男性的な光景に勇心勃然と湧くのを覚えた。こうした鉄や鋼は軽軌条となり、鑄鉄管となつてゆくのである。鉄というものにこんな深い印象を受けて帰校すると殆んど同時に、普通冶金から新たに鉄冶金が分離す

ることとなつたので、私はたちどころに鉄冶金専攻と決めた。丁度その頃“日本鉄鋼協会”というものが創立されて、俵先生に勧められて入会した。英国の有名な The Iron and Steel Institute なんてことは勿論知られなかつた。鉄冶金の分離、私の鉄冶金科入学、そうして日本鉄鋼協会の創立は殆んど全く同時といつてよい程だ。その日本鉄鋼協会が誕生 50 年となると聞く、私の鉄の生命も 50 年となるわけだ。熔鉄炉の能力が 1 日 2000 t となり、わが国鉄鋼生産力が世界第 3 位となる、全く夢のようだ。こうしたことはわが国製鉄事業の消長とともに日本鉄鋼協会の努力を物語るもので誠に感慨無量なるものがある。只当時の諸先輩特に創立者の俵先生の他界されたことが遺憾の極みである。日本鉄鋼協会がわが製鉄産業の限りなき将来の発達を見守りながら、永遠にその栄光と発展を続けられんことを祈りつつ思い出の稿を終る。

(元評議員)

## わが国転炉製鋼の回顧

斎 藤 三 三

このごろ、はからず筐底永く埋もれていた転炉吹製銑鉄諸成分の変化曲線図を見つけた。官営八幡製鉄所半世紀前の B 鋼 22638 番 (軌条材—B はベセマー) と B 鋼 22740 番 (軟鋼) のそれであつた。学窓を出て八幡に転炉工を拝命し、酸性 10 t 転炉の短くチビタ蓮根羽口の差替えの炉前現場で、灼熱した炉底の内から噴き出す不意の焰突に幾度か焦した眉毛の臭い匂がまだ鼻毛をむずがらせる。われらが日本鉄鋼協会の回顧については、これが執筆に極めて相応しい方々が多土済々なので、私は協会の眼目たる鉄鋼技術の研究と開発とに直結した裁断面即ちわが国転炉製鋼の推移—ベセマー、トーマスそして純酸素製鋼の梗概につき記述を試み責をふさぐこととした。

官営八幡製鉄所に酸性転炉 10 t 2 基が建設され、わが

国に初めてベセマーの吹錬が開始されたのは明治 34 年 (1901) 年の秋であつた。これは当時のわが国銑鋼一貫工場の粹、近代化製鉄八幡へのいわば導入技術のシンボルであつて、その多産性へ賭けた八幡製鉄所当事者の期待が小さいものでなかつたことは推測に難くない。それにも拘らず、開始後の作業は容易でなく、吹製日に漸く 1 回に過ぎない場面も少なくなかつた。従つて生産の起伏不常を免るることを得なかつた。後漸く作業上の障碍を克服して操業の正常化を保持し得るに至り、吹錬開始後あまり時を経ずして 1 年半余におよぶ吹製の休止を除いて、前後 25 年に亘つて連綿稼動を続け、総 t 数 273 万の鋼生産の成果を挙げ、明治・大正に亘るわが国鉄鋼業の揺籃期における需給に対し、寄与するところ少ししなかつた。然るに昭和 2 年 (1927) の 11 月に至り、2 基の